

自覚力

phoenixevil

1章 自分がエゴイストだと自覚する

「キミのために言っているんだよ」

「あなたの将来のためなのよ」

ほんとうに??

親が子に「あなたの将来のため」と言う場合、親の見栄のためであることが多い。

親が近所のお母さま方に「あなたの子は立派ねえ」と言われたい。

つまり、「あなたのため」ではなく、「自分だけのため」なのです。

「自分のためだし、子供のため」ですら、ありません。

自分がエゴイストであると自覚していないと、偽善者になります。

これはいちばんタチが悪い。

だって反省しない、というか反省する必要があることに気付かない。

「自分はエゴイストではない」という人がいちばん汚いエゴイストです。

自分の言動は相手のことをほんとうに考えて、発言しているか。

それを常に意識する必要があります。

別にエゴイストなのは、いいんです。

人はみな、エゴイストだとぼくは思っています。

第一、エゴは自分の防衛本能です。

まずは自分の基盤を安定させなければ、他人は救えません。

「これ食わないと飢え死にするけど、あの子にあげよう・・・ギャー・・・死」

なんともアホな例を出しましたが、自己犠牲を美德とする方は、このように、自分の命をおろそかにしています。

大事ななのは、無意識に自分のために動いている自分を意識すること。

そのうえで、「こういう面では自分のため。でも、ここは他人のために行動できないかな」と考えてみるのです。

つまり、俗にいうWIN-WINを考えることです。

ぼくが自覚力なかったなと感じたのは、ぼくが相談に乗りたがっていたことでした。

結局は自己主張がしたかった。

自分の正論を聞いてほしかった。
自分が正しいと認めてほしかった。

完全な（自分のためだけの）エゴでした。
自分のエゴを自覚した時は、ほんとうに恥ずかしかった。
なんてバカなことしていたんだろうと思った。
それ以来、正論を述べなくなりました。

「あくまでオレの意見だから、ピンと来なければ、ムシしていいからね」と自分の正しさを認めてほしいという欲求を満たせないようにしました。

こう言うと、「完全に相手のためなのか！嘘をつくな！！汚らしいエゴイストめ！！！」と言われてしまいそうですね。（笑）

もちろん、相手のためだけではありません。
自己主張している時点で、自己重要感（認められたい欲求）は十分満たされていました。
「正論を述べたい」という部分を、「相手のため」になるように修正しただけです。
これでWIN-WINです。

自分のエゴを自覚することで、ほんとうの「利他」を実現できるのです。

2章 自分に行動力がないことを自覚する

ぼくは大学でさまざまなことに挑戦しました。

兼部、手話スピーチコンテスト、転学部、入学式や卒業式の実行委員。

「いろいろやってるね」「すごい行動力だね」と言われてきたし、「オレは行動力には自信がある」と自分でも思っていました。

でも、活動が終わった後の空虚感。

結局はどれも中途半端だったわけです。

最初は「この失敗はいい経験だ」と正当化していましたが、やっぱり薄々気づいていました。

やっぱり自分にはウソをつけないものです。

自覚力とについて考えるようになってからは、きっぱりと「自分には行動力がないことを自覚する」と決めました。

最初の一步を踏み出すのは大事です。

でも、もうひとつ。

「やると決めたら、きちんとやり切る」のも大事なんです。

両方できて、はじめて「行動力がある」と言えます。

こう言うと、へこむ方がいらっしゃるかもしれません。

へこむ必要はありません。

まずは自分に行動力がない事実を自覚するのです。

自覚ただけで、「オレは行動力アリアリだぜ！」の勘違いヤローより数段上です。

自分の弱さを自覚ただけでも、強い証拠です。

そんな自分をホメてあげてください。

そのうえで、「どうするか」です。

こんなぼくでも毎日、続いていることが2つだけありました。

ブログと読書です。

言い古されたことですが、好きなことなら、誰だって続くのです。

好きなことが見つからないなら、いつそ「三日坊主をコレクションしてやろう」と思えばいい。

「ん？それだと最初に言ったすべてが中途半端な状況に逆戻りじゃん！」と思うかもしれません

。

でも、「オレは行動力あるぜモード」でやるのと、「ひとつひとつが中途半端だと自覚しよう！」と思ってやるのとは全然違います。

前者は反省もなく「なんでうまくいかないんだ、このヤロー」とイライラしっぱなしです。でも後者は「うまくいかないのは覚悟の上だ。それでも続くことが見つかるまで、淡々とやろう」と反省します。

精神的にも穏やかです。

結果的に「自分は行動力がない」ことを受け入れた人が、類まれな行動力を発揮するのです。

3章 自分が寂しがり屋であることを自覚する

この章は「孤独力」があると自負している方に向けて、書きました。

もちろん、ぼくも自負しています。

「孤独力」とは、ひとりでいても平気でいられる力。

キライな人を平気で切れる力。

嫌われることを恐れず、本音で話せる力などを言います。

でも、やっぱり人は寂しがり屋な生き物です。

なにかに打ち込んでいる人はそうでもないかもしれません。

それはすばらしいことなので、ぜひ続けてください。

問題は、ぼくを含め、とくに打ち込める物のない人です。

ぼくも群れはキライなのに、つい群れの中に入ってしまうことがあります。

またはミーティングで集まった後、すぐに帰ればいいのに帰れない。

「ちくしょー、孤独力は成功の必須条件なのに……。このままでは冴えない人生を送ってしまう」

こう考えては、自己嫌悪に陥ったものです。

そこで、まずは自分が寂しがり屋であることを受け入れる、つまり自覚することにしました。

群れに入ってしまった時も、帰りにくく感じた時も、「あっ、いまオレ寂しがってる」と自分を客観的に眺めてみました。

もちろん、「バカヤロー、速く抜け出しやがれ！」なんて自分を責めません。

逆効果ですから。

「まあ、ちゃんと自覚しているだけでもヨシとするか」と思うだけにしました。

不思議なことに、今は群れの中に入りたいと思わなくなりました。

食堂で、みんながワイワイしているところに遭遇しても、「よっ、おつかれ」とだけ言って、ひとりで食事しても平気になったんです。

自覚することで力がフワッと抜けたからではないかと思っています。

力を抜くことで、気がラクになって、いい意味で「どうでもいいか」と思えるようになったのでしょう。

だから、自覚するだけでいいんです。

後は流れに任せてみてください。

時間が解決してくれます。

4章 自分が無知無能であることを自覚する

無知の知。

ぼくは自覚力をあらわす言葉ではないかと思っています。

勉強はすれば、するほど、その深さがわかります。

上には上がいることがわかるのです。

だから、成功者は「自分なんてまだまだです」と謙虚なのです。

アレは、「謙虚に見せて好かれよう」という打算的なものではありません。

心からそう思っているのです。

ぼくの大学の卒業生で、世界を舞台に活躍されている方とお話しする機会がありました。

驚きました。

ぼくの言うこと、言うこと、全部ホメてくださるのです。

「すばらしい考えをもっているね」

いやいや、あなたの考えのほうがすばらしいですよ。

「よく考えているんだね」

いやいや、あなたの方がぼくよりずっと考えていらっしやって、結果も出しているじゃないですか。

と、ツッコみたくなります。

自分がまだまだだと思っているからこそ、ぼくのような若造からも学ぼうという姿勢が伝わってきました。

ホメてくださったのはもちろんうれしかったです。

でも、圧倒的な器の大きさを見せつけられたような気がして、冷や汗も出ました。

自覚力は、謙虚や器の大きさに繋がると感じました。

「ぼくなんてまだまだ勉強不足だよ」という人の方が「オレはこんなに勉強している」と言う人より、はるかに勉強しているのです。